中学校における学校不適応とソーシャル・スキルに関する研究

―ソーシャル・スキル尺度の開発的・予防的教育相談への活用―

研修機関　鳴門教育大学大学院学校教育研究科　指導教官　　氏　名 中津　郁子
高知市立潮江中学校　　職名　教諭　　氏　名 髙橋　由希子

１　はじめに

平成 28 年度「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省、2016)によると，不登校生徒数は、平成 13 年度の 138,722 人をピークに減少傾向が見られていたが、平成 24 年度以降再び増加傾向に転じており、不登校問題は学校現場において喫緊の課題と言えよう。本研究では公立中学校２校を対象に２つの質問紙によるアンケート調査を実施し、解析したが、不適応生徒の特性を明らかにし、解析結果を開発的・予防的教育相談に活用していくことは、不適応、不登校に対する予防的対策を検討する上で意義あることと考えられる。

２　研究目的・方法

研究１では「hyper-QU ソーシャル・スキル尺度（河村、2000）」(「hyper-QU 尺度」と略す）を用い、不適応生徒の特性について検討すると同時、不適応予備軍の早期把握の方策について検討した。研究２では「hyper-QU 尺度」と同等の機能を有し、より広く学校現場で利用可能な質問紙「対人関係ソーシャル・スキル尺度」(「対人関係尺度」と略す）を新しく作成し、その調査紙としての整合性を検討したのち、不適応群の特性の抽出，不適応生徒の早期把握と支援における有用性について検討した。なお、「hyper-QU 尺度」の使用にあたっては(株)図書文化社の許可を得、「対人関係尺度」の作成にあたっては、佐賀県教育センターの「学校生活アンケート」(2011)と高知県教育研究所の「あったかアンケート」(2012)を参考とし，設問の仕方等については学校現場の協力を得て生徒と学校の実態に合ったものにした。また、学校不適応とは「学校における集団活動や学業等に適応の困難さがあり、本人や周囲の人が苦しんでいる状態」、さらに「長期欠席に限らず、学校に登校しているものの対人関係等で困難さがみられ、欠席数が 30 日以上にならないが、休みがちである状態」とし、日頃生徒に関わっている教師からの見取りや不登校関連の委員会から「気になる生徒」としてあげられた生徒も含めた。アンケート調査に際しては 2 校の校長から許可を得、調査内容の取扱いなど個人情報の保護には細心の注意をはらった。

３　研究内容（研究結果）

(1)　研究１

ア　一般群並びに不適応群における「hyper-QU 尺度」因子得点の検討

B 校全学年を対象に「hyper-Q 尺度」による調査(平成 28・29 年度)を行った。その結果、平成 28・29 年度調査とも不適応群の「かかわり」因子得点は一般群に比し有意に低い値を示していた(表１、２)。

表１　一般群並びに不適応群におけるhyper−QUソーシャル・スキル尺度2因子得点（平成28年度調査　全学年）

	一般群(n=259)		不適応群(n=37)		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*
配慮	32.03	4.10	31.24	4.00	1.09 n.s.
かかわり	29.29	5.55	25.95	6.77	3.33***

***p<.001

表２　一般群並びに不適応群におけるhyper-QUソーシャル・スキル尺度2因子得点(平成29年度調査　全学年)

	一般群(n=253)		不適応群(n=53)		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*
配慮	32.01	4.12	30.55	4.87	2.28*
かかわり	29.02	5.19	24.72	7.23	4.12***

*p<.05　***p<.001

イ　一般群並びに不適応群における「hyper-QU 尺度」下位項目別得点の検討

「かかわり」因子の下位項目別得点を比較検討した結果、不適応群では、一般群に比し全項目で低値を示していたが、特に項目 17、項目 10、項目 16 で有意差が認められた(表３)。

表3　hyper-QUソーシャル・スキル尺度「かかわり」因子の項目別得点(平成29年度調査　全学年)

かかわり項	一般群(n=253) *M*(*SD*)	不適応群(n=53) *M*(*SD*)	*t*
10. みんなと同じくらい話している	3.37 (0.78)	2.77 (1.01)	4.06***
11. みんなのためになることを自分で見つけている	3.05 (0.81)	2.75 (0.92)	2.15*
12. 友人が楽しんでいる時に盛り上げることができる	3.18 (0.86)	2.66 (1.09)	3.25**
13. うれしい時は身ぶりで気持ちを表現している	3.30 (0.87)	2.91 (1.01)	2.92**
14. わからないことがある時，友人や先生に聞いている	3.39 (0.75)	3.02 (0.93)	3.13**
15. 自分から友人を遊びに誘っている	3.26 (0.92)	2.75 (1.11)	3.11**
16. 係の仕事をする時，意見を言っている	2.92 (0.91)	2.43 (0.93)	3.57**
17. 困っている時に，手伝ってほしいとお願いしている	3.37 (0.82)	2.66 (1.13)	4.34***
18. 他の人に左右されずに自分の考えで行動している	3.19 (0.79)	2.75 (0.96)	3.06**

(　　)は標準偏差(*SD*)を示す　*p<.05　**p<.01　***p<.001

ウ　一般群から不適応群に移行した 10 名の検討（B 校）

平成 28 年度から平成 29 年度にかけ、一般群から不適応群に移行した 10 名について検討した結果、10 中 4 名の「かかわり」因子得点は一般群（全学年）の「かかわり」因子の得点分布（平均値±1SD）から設定した不適応予備軍の基準値以下の値を示していた。また、発達障害の診断を受けた生徒や心理的要因を抱えた生徒 4 名が移行群に含まれていた。

エ　小括

「hyper-QU 尺度」の因子得点を一般群と不適応群で比較した結果、①不適応群では「かかわり」因子で有意に低い値を示し、②「かかわり」因子の下位項目別検討では、不適応群ですべての項目で有意に低値を示していたが、その中でも「困っている時に、手伝ってほしいとお願いしている」（項目 17)、「みんなと同じくらい話している」（項目 10)，「係の仕事をする時、意見を言っている」（項目 16）で有意差が認められた。また③一般群における「かかわり」因子の得点分布（平均値±1SD）から、不適応予備軍にある生徒を把握するための基準値を設定したが、一般群から不適応群に移行した 10 名中 4 名の「かかわり」因子得点は基準値以下を示していた。今後、一般群の得点分布から「不適応予備軍」の基準値を設定することによって不適応予備軍にある生徒の早期把

握と対応が可能でないかと考えられた。

(2) 研究２

ア 「対人関係尺度」の作成と「hyper-QU 尺度」との関連

「hyper-QU 尺度」による調査を多数校で行うのには制約があるため、「hyper-QU 尺度」と同等の機能を有し、より広く活用可能な質問紙「対人関係尺度」を作成した（表４）。「対人関係尺度」は３因子（つながり、気配り、不安感情因子）から構成され、因子分析、クロンバックの α 係数の検討から調査紙としての十分な内的整合性が示された。また、「hyper-QU 尺度」と「対人関係尺度」による調査を同時期・同一集団（平成 29 年 6 月、B 校）で行い「hyper-QU 尺度」と「対人関係尺度」の関連について検討した。その結果、配慮因子とかかわり・気配り・つながりの３因子、かかわり因子と気配り・つながりの２因子、気配り因子とつながり因子で相関が認められたが、不安感情因子と他の因子との間に相関は認められなかった（表５）。

表４　対人関係ソーシャル・スキル尺度

質問項目
気配りに関する質問事項
1. 話を聞く時，話をさえぎらず，最後まで聞いている
2. 相手のことを考えて話している
3. 自分の考えと違っても，みんなで決めたことには従っている
4. 与えられた仕事は責任を持ってやっている
5. 人の間違いや失敗を許すことができる
6. 約束したことは守っている
7. トラブルになった時，自分にも原因がなかったかどうか考えることがある
8. 自分がいいと思ったことは，なかまにもしてあげている
9. 友人が相談してきた時には，話を聞いてあげている
つながりに関する質問事項
10. 周りの人とよく話をしている
11. 周りの友だちが助かることを自分から進んでやっている
12. 体育祭や文化祭などの行事で周りのみんなに積極的に関わり，一緒に楽しめる
13. うれしい時や悲しい時は，色々な方法で自分の気持ちを周りに伝える方ですか
14. 分からないことがある時，誰かに質問している
15. なかまに入りたい時，自分から声をかけている
16. 班や学級で活動する時に，自分の意見を言っている
17. 自分が困っている時，誰かに「手伝ってほしい」と頼むことができる
18. 正しくないことやいやなことははっきりと断っている
不安感情に関する質問事項
R 19. 自分のことをなかまから何か言われているのではないかと気になる
R 20. 仲間の表情やしぐさが，とても気になる
R 21. いつもなかまの中にいないと不安な方である
R 22. 友だちが何を考えているかいつも気になる

※Rは逆転項目とする

表５ hyper-QUソーシャル・スキル尺度と対人関係ソーシャル・スキル尺度との関連(n=292)

	配慮	かかわり	気配り	つながり	不安感情
配慮	—	.53***	.75***	.45***	.08
かかわり		—	.46***	.77***	.04
気配り			—	.55***	.00
つながり				—	.08
不安感情					—

***p<.001

イ　一般群並びに不適応群における「対人関係尺度」因子得点の比較検討

(ｱ)　B、C 校における「対人関係尺度」3 因子得点の検討（平成 29 年度調査）

B、C 校の 2 校を一括し、「対人関係尺度」因子の得点を一般群と不適応群で検討した。その結果、不適応群では一般群に比し、「つながり」因子で有意に低い値を示していたが、「気配り」、「不安感情」因子では 2 群間に有意差は認められなかった（表６）。

表６　一般群並びに不適応群における対人関係ソーシャル・スキル尺度3因子得点（平成29年度調査　B・C校）

	一般群(n=580)		不適応群(n=78)		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*
つながり	3.22	0.58	2.92	0.76	3.38***
気配り	3.46	0.45	3.38	0.46	1.46 n.s.
不安感情	2.65	0.92	2.46	0.86	1.75 n.s.

***p<.001

(ｲ)　B 校における「対人関係尺度」3 因子得点の検討（平成 28 年度・29 年度調査）

B 校における「対人関係尺度」3 因子得点を一般群と不適応群で比較検討した。その結果、平成 28 年 12 月調査（現 2，3 年生）、平成 29 年 6 月調査（全学年）とも「つながり」因子で一般群と不適応群で有意差が認められたが、「気配り」因子、「不安感情」因子では 2 群で有意差は認められなかった（表７、８）。

表７　一般群並びに不適応群における対人関係ソーシャル・スキル尺度3因子得点（平成28年度 B校1・2年）

	一般群(n=156)		不適応群(n=30)		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*
つながり	25.77	4.45	23.57	5.80	2.36*
気配り	30.13	4.20	30.70	3.70	0.70 n.s.
不安感情	9.82	3.46	8.70	3.37	1.63 n.s.

*p<.05

表８　一般群並びに不適応群における対人関係ソーシャル・スキル尺度3因子得点（平成29年度 B校全学年）

	一般群(n=250)		不適応群(n=49)		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*
つながり	26.08	4.25	23.25	5.80	2.87**
気配り	31.19	3.70	31.24	3.70	0.09 n.s.
不安感情	10.53	3.43	9.92	3.37	1.13 n.s.

**p<.01

(ｳ) C 校における「対人関係尺度」3 因子得点の比較検討（平成 28 年度・29 年度調査）

C 校における「対人関係尺度」3 因子得点を一般群と不適応群で比較検討した。その結果、平成 28 年 3 月調査（1・2 年生）、平成 29 年 6 月調査とも不適応群で「つながり」因子と「気配り」因子の 2 因子が有意に低い値を示していた（表９，１０）。また，平成 28 年度から 29 年度に不適応へと移行した生徒は 3 名では「気配り」因子,「つながり」因子得点が不適応予備軍の基準値以下の値を示した生徒が各々1 名に認められ、残りの 1 名については教師からの聞き取り調査で自己評価と他者評価が大きくかけ離れた生徒であった。

表9　一般群並びに不適応群における「対人関係ソーシャル・スキル尺度」3因子得点（平成28年度調査 C校1・2年）

	一般群（*n*=222）		不適応群（*n*=17）		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*
つながり	25.45	4.85	23.06	5.14	1.95*
気配り	30.61	4.28	27.59	4.91	2.77**
不安感情	10.30	3.50	10.76	3.11	0.54 n.s.

*p<.05　**p<.01

表10　一般群並びに不適応群における「対人関係ソーシャル・スキル尺度」3因子得点（平成29年度調査 C校全学年）

	一般群（*n*=330）		不適応群（*n*=29）		
	M	*SD*	*M*	*SD*	*t*
つながり	25.55	4.92	23.52	5.16	2.12*
気配り	31.12	4.29	29.07	4.46	2.46*
不安感情	10.66	3.86	9.69	3.07	1.32 n.s.

*p<.05

ウ　小括

新しく作成した「対人関係尺度」は①「hyper-QU 尺度」とほぼ同等の機能を有し、質問紙として広くアンケート調査に使用可能であることが示された。②「対人関係尺度」は 3 因子構造が妥当であり、それぞれ「つながり」因子、「気配り」因子、「不安感情」因子としたが、③一般群と不適応群の 3 因子得点を B、C 校、B 校単独、C 校単独で検討した結果、すべての検討で、不適応群では一般群に比し、「つながり」因子得点は低値を示していた。ただ、④C 校単独での検討では「つながり」因子に加え、「気配り」因子得点も有意差をもって低値を示した点が注目され、学校間で不適応生徒の背景が異なる可能性が示された。また、⑤平成 28 年度から 29 年度に不適応へと移行した生徒は 3 名では「気配り」因子、「つながり」因子得点が不適応予備軍の基準値以下の値を示した生徒が各々1 名に認められ、残りの 1 名は教師からの聞き取り調査で自己評価と他者評価に乖離が見られる生徒であった。

4　まとめ

(1)　考察

今回、ソーシャル・スキル尺度の開発的・予防的教育相談への効果的活用の検討を目的とし、研究１では「hyper-QU 尺度」を用い、一般群と不適応群にどのような差が見られるかについて検討すると同時に、不適応予備軍の早期把握の方策について検討した。また研究２では「hyper-QU 尺度」と同等の機能を有し、より広く学校現場で使用可能な質問紙「対人関係尺度」を新しく作成し、不適応群の特性の解析、不適応予備軍の早期把握と支援における有用性について検討したが、まず

「hyper-QU 尺度」を用いた研究１では、不適応群において「かかわり」因子が有意に低い値を示した。さらに「かかわり」因子の下位項目の得点を 2 群間で比較したが、不適応群では一般群に比し、特に「困っている時に、手伝って欲しいとお願いしている」、「みんなと同じくらい話している」、「係の仕事をする時，意見を言っている」といった項目で有意差が認められた。このことは、不適応あるいは不適応傾向が見られる生徒では、自分から積極的に周囲に関わろうとする、また、自分の意見をなかまに上手く伝える、といったスキルが低い傾向にあると考えられ、さらに何らかの心理的要因が加わり、不適応、不登校へと移行するのではないかと考えられた。また B 校における検討で、一般群から不適応群への移行が 10 名に認められ、10 名中 4 名の「かかわり」因子の得点は一般群の得点分布から設定した不適応予備軍の基準値以下を示していたことが注目され、今後、因子得点から不適応予備軍の基準値を設定することによって不適応生徒の早期把握と対応が可能でないかと思われた。また不適応の原因が発達障害や心理的要因であるとされた生徒が 4 名に認められた。奥山ら(1994)は，発達障害をもつ子どもは対人関係に困難さがあり、さらに自己評価の低下、劣等感や意欲の低下が引き起こされると二次的障害として不登校へとつながると述べており、今後これら生徒に対しては多職種との連携を緊密にした幅広い取組みが必要と思われる。

「hyper-QU 尺度」をアンケート調査紙として県下すべての中学校で使用するには予算面等の問題も含めいくつかの制約がある。そのため研究２では「hyper-QU 尺度」と同等の機能を有し、より広く学校現場で利用できる質問紙を作成し、その有用性について検討したが、新しく作成した質問紙「対人関係尺度」は「hyper-QU 尺度」と同等の機能を有し、学校不適応への予防的・開発的教育相談に有用と思われた。「対人関係尺度」は 3 因子（つながり、気配り、不安感情）から構成されているが、一般群と不適応群における尺度得点の比較検討を B、C 校で行った結果、「つながり」因子は B、C 校とも不適応群で有意に低い値を示していたが、C 校では「つながり」因子に加え「気配り」因子でも有意差が認められた。「気配り」とは心をくばる、他人や他のことのために気を使うという意味であり、気配りが未熟なことによって相手の立場や気持ちを考えずに行動することによって周囲との関係がスムーズに構築されず、対人関係に困難が生じ、他者とトラブルを起こすといった問題行動へと発展していく可能性も考えられる。「気配り」因子が低値の背景には、日常生活における基本的ルールやマナーの希薄化あるいは欠如が影響しているのではないかとも考えられ、家庭や地域と協働した対応が必要なことを示しているのではないかと思われる。また C 校における調査では単一因子でなく 2 因子で低値が認められたことは、C 校における不適応群ではそれに至る要因が輻輳して存在する可能性を示しており、より緻密な要因分析と対応が必要なことを示しているのではないかと思われる。言い換えれば、不適応生徒における特性の多様性を把握するために「対人関係尺度」の 3 因子構造がより有用であることを示しているのではないかとも考えられ、その使用は幅広く不適応予備軍にある生徒をひろいあげると同時に、その背景の複雑さと対応の難しさを示すものでないかとも思われる。

今回、対人関係尺度」の作成に際し、不適応に至る要因の一つに不安感情があるのではないかと考え、「不安感情」に関する項目を加えたが、「不安感情」因子については一般群と不適応群との間に有意差は認められなかった。「不安感情」因子は，「気配り」や「つながり」因子と比較して不安定なものであり、不安感情が強くかつ持続されない限り有意差として出てくることはまれでないかと思われる。

ただ不安感情については他の 2 因子に影響を与え、不適応への加速因子となる可能性もあり、今後継続的にデータを集積し、その意味づけと位置づけを明確にする必要があろう。また一般群と不適応群で差が認められなかったことについては「不安感情」の因子項目が比較的友人関係に特定された質問となっていたことも一因と考えられるが、ストレッサーは「友人」「教師」「部活動」とさまざまな面から測定される必要があり、「中学生用学校ストレッサー尺度」（岡安ら、1991)なども参考にしながら，質問項目の精度を高めていくことが重要であると考える。

また今回、学校現場と話し合う中で、「不適応生徒としてソーシャル・スキルの数値を低く自己評価している生徒については実態として納得いくが、ソーシャル・スキルの数値を高く示している生徒の多くは現実と乖離した結果を示している」との指摘を受けた。そのため自己評価と教師の見取りに大きな隔たりが見られた生徒 13 名（平成 29 年度、B 校）について、担任による評価（他者評価）を実施してもらった結果、「かかわり」因子得点は自己評価群（31.15±3.83)、他者評価群(20.69±2.81）と他者評価群で有意に低く、全員不適応予備軍の基準値以下を示していた。今後、質問紙による「不適応予備軍」を早期に把握するためには、すでに述べた基準値以下の値を示す生徒をひろい上げる同時に、担任から見て自己評価が大きくかけ離れた生徒については他者評価を併用することによって一層早期に把握・対応が可能となるのではないかと考えられた。

(2)　今後の課題

不登校問題が学校現場において喫緊の課題である中、学校現場ではどのような視点を持ち、支援を行っていけばよいか、対人関係に焦点をあて研究を行った。特に新しく作成した「対人関係尺度」の有用性が確認されたことは広く学校現場で利用可能な点で評価されるものと思われる。今回「対人関係尺度」因子の一つである「不安感情」因子ついて、一般群と不適応群で差が認められなかったが、不安、緊張、抑うつなど心因性の問題が不適応への移行を加速する可能性は否定できず、今後継続的にデータを集積し、「不安感情」因子の意味づけと位置づけを明確にする必要があろう。またそのことによって不適応生徒の特性が一層ひろく把握可能となり、適切な支援へとつなげていくことが出来るのではないかと思わる。不適応、不登校生徒への対応が担任教師だけでなく、学校全体として取り組むべき問題であることは言うまでもなく、今後さらに専門的知識と技能を備えた多職種との連携と協働など「チーム教育」としての組織の構築が必要と思われた。なお、本研究のデータは B、C 校から得られたものであり、今後、個々の生徒の特性や調査対象校の教育風土についても反映される調査法の開発が望まれる。

終わりあたり、ご指導、ご支援をいただいた高知県教育委員会の皆様方、B、C 校の校長並びに教職員皆様方に心から感謝の意を表します。

引用文献

河村茂雄(2000) よりよい学校生活と友達づくりのためのアンケート hyper-QU，図書文化社

文部科学省(2016) 平成 28 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸問題に関する調査 http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/02/1382696.htm (2017 年 11 月 12 日閲覧)

岡安孝弘・嶋田洋徳･丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美(1991) 中学生における学校ストレスの研究、日本心理学会第 55 回大会八表論文集、431

奥山みず穂・庭山英俊ほか(1994) 学習障害の二次的情緒障害と考えられる不登校についての一考察，弘前医学，Vol.46，No.2，137-142